

『<sup>お</sup>隕ちた<sup>にがよもぎ</sup>「苦哉」』の星・福沢諭吉とドストエフスキイ

(河合出版、一九九七年、三月)

高橋 誠一郎

西欧文明の周縁に位置する日本とロシアから二人の人物が、奇しくも幕末の一八六二年に初めてヨーロッパを訪れた。一八六〇年に咸臨丸でアメリカを訪問していた福沢諭吉と一八五九年にシベリア流刑から戻って文筆活動を再開していたドストエフスキイである。両者はヨーロッパで会う機会こそなかったものの、パリ、ロンドンなどの都市を相前後して訪れており、帰国後に二人は初めて見た西欧の観察や印象を『西洋事情』(一八六六年)や『夏象冬記』(冬に記す夏の印象)、一八六三年などの作品に書き記した。

本書の筆者である芦川進一氏は、ドストエフスキイにおけるキリスト教思想を研究し、この本の先駆けとも言える『夏象冬記』における聖書モチーフ(一九八三)の他にも「マルメラードフと『最後の審判』(一九七六)、「ボードレルとドストエフスキイ…ニーチェのデカダンス概念から」(一九八五)、『法学部中退』ラスコーリニコフがみた、三つの夢(一九九七)などの多くの論文や『イエス』

(小学館)の共訳がある。本書において芦川氏は、ドストエフスキイがシベリアの流刑地の獄中で聖書をひたすら読んだことに注意を促して、彼の西欧体験を「聖書の世界の新たな自覚のドラマ」ととらえ、『夏象冬記』を読み込むことで、「ドストエフスキイ文学の新しい誕生の現場に居合わせることもなる」(四一頁、以下本書よりの引用は頁数を数字のみで示す)としている。さらに、『夏象冬記』でのドストエフスキイの考察に福沢諭吉の西欧体験と考察をも組み込むことによつて、氏はロシアだけでなく、日本の近代化の問題点にも迫り得ている。

さて、本書は次の五つの章から成り立っている。

第一章 ドストエフスキイ『夏象冬記』を読む―第六章「ブルジョ

ア試論」

第二章 福沢諭吉―その前半生―門閥制度からの脱出

第三章 一八六二年、二つの西欧体験

#### 第四章 啓蒙の工夫

##### 第五章 「休息」する「人民」

以下、本書の内容を、比較文明的な視点から、順をおって紹介していきたい。

第一章では、『夏象冬記』のクライマックスといえる第六章「ブルジョア試論」の分析を試み、ドストエーフスキイが西欧旅行を通して、かつて自分が理想とした「自由・平等・友愛」などの理念が西欧には存在しないことを確認するとともに、西欧の「原理」を「孤立と、強烈な自己保存と、自営と／自己自身の『我』による自決」と、「全自然界と自己以外の全人類とに対立させる原理」とし、「このような対立の精神から、友愛が生まれるわけがない」（四六）と鋭く批判していることに注目する。

すでに声川氏は論文『夏象冬記』における聖書モチーフにおいて、『夏象冬記』には、「バアル」や「黄金の仔牛」など、旧約聖書の異教の神を現す用語だけでなく、黙示録からも「バビロン」や「しゅろの枝」などの用語が、そして福音書からも「一つの群」や「互いに愛し合え」という言葉が引用されていることを具体的に例示しながら、ドストエーフスキイにおける聖書の意味の大きさを明らかにした。ことにロンドン万国博に集まった大群衆についてドストエーフスキイが「これは何か聖書的光景と言う外ない。何かバビロンに関するような、眼前で成就しつつある黙示録の予言のような」と述べていることに注目し、それらの用語が「文明の光を代表すると共に、最も深刻にその病をも抱えていたパリとロンドンという大都会の終末的現実に向かつて」投げかけられていることを強調して

いた（『文集ドストエーフスキイ』第三号、一二六頁）。

それらの考察を踏まえて声川氏は、ドストエーフスキイがこれら大都市に「エルサレムにおいて十字架の死を控えたイエスから発せられた遺言『互いに愛し合いなさい』を対置させた」ことの意味は重いと指摘し、『死』を越えてなお『愛』に捨身する現代のイエス・キリスト像の可能性」という「ドストエーフスキイ文学の原構図」が、すでに『夏象冬記』において現れていると主張している（六九～七〇）。

続く第二章では、ロシアの農奴制下に生きたドストエーフスキイに對して、「旧い封建的門閥制度」からの「彼の脱出への意志と、その意志と相即した西洋への希求、そしてその夢と野心を実現するための猛烈な修行」（七六）を行った若き福沢諭吉を対置する。そして、彼ら二人が生きていた社会の問題点と彼らが担わねばならなかった課題を明らかにするとともに、「父の死」や「母の存在」など共通のテーマの比較もなされている。

こうして、ドストエーフスキイの作品という深いけれども地味な「タテ糸」に、福沢諭吉という別な色彩の「ヨコ糸」を編み込むことによつて、若い日本の読者に対しても新鮮な、比較思想的な視点から両者の西欧観に関心を呼び起こすことに成功している。しかも、声川氏は単に生活レベルの比較だけではなく、『福翁自伝』から様々なエピソードを引用しながら、福沢の「伸びやかで簡潔なしかも極めて具体的な文章」とドストエーフスキイの「独特の巧妙で屈折した節回し」の文体の対照やその面白さにも注意を喚起しながら、分析を進めている。

本書の中核をなしていると思える第三章では、一八六二年にヨ一

ロッパを訪れたドストエーフスキイと福沢諭吉の二人がセント・ポール寺院と蒸気機関車をどのように描いたかを比較している。ここで注目されるのは、芦川氏の考察が単に二人の西欧文明に対する観察の違いだけではなく、文体の分析を通して彼らの方法論の違いにまで迫り得ていることである。

たとえば、氏によれば福沢のセント・ポール寺院の描写には「心理的・感情的要素」がほとんど入らず、「簡潔な客観的記述を重ね対象を刻んでいくという方法」を取っている。これに対しドストエーフスキイは「聖ポール大寺院を『見た』とか『見なかった』という一見どうでもいいような馬鹿げた道化じみた頼りなげなことを言いながら、いつの間にか我々読者に：中略：西欧文明それ自体の確かさについてまで疑問の余地のあることを感じさせて行く」のである（一三七）。

こうして、「西洋文明の具体的な仕掛けを客観的・具体的に『探索』し、その知識を正確に積み上げて祖国日本に報告しようとする『啓蒙的レアリスト』である福沢と、『対象とする文明やその根底にある理念の一切を一度『疑問符』の内に投げ込み、その存在と価値との再検討を試みる『方法的懐疑主義者』ドストエーフスキイとの違いを浮き彫りにする（一三八）。

さらに氏は、「産業革命が展開する具体的な先兵となったのが、蒸気機関と鉄道網の発達であったこと」（一四二）を指摘しながら、福沢の『西洋事情』においては、「蒸気」の説明が、「蒸気機関」から『蒸気車』へと進み、そしてついには『文明』発達の必然へと展開していることに注意を向けて、「彼の一連の論述の小気味よさは、そのまま福沢という一つの『啓蒙の蒸気車』が日本を舞台とする『文

明開化』の線路上を軽快に進み始めた様」を思わせると記している（一五七）。

一方、ドストエーフスキイにおいては「ああ、蒸気車の中に何もする事なく座っているのは、何と退屈なことか」と非常に情念的に蒸気機関車が否定的に描かれ、さらに『白痴』においては登場人物のレーベジェフが現代を「悪徳と鉄道の現代」、「人間を迷わせる鉄道網のもとにおいて」「（『生命の源』は枯れたり濁ったりしたとし、ヨーロッパに拡がる「鉄道網」を「黙示録」の中の「苦文」に例えていることに注意を払って、「これが人類終末の予兆」として用いられていることをも指摘している。

第四章において、芦川氏は「明治維新」を「半開」の国日本が西洋の『文明国』を模範とし、『文明』への一步を踏み出した記念すべき事業である（一八七）と認識した福沢が、成年男子だけでなく女子供にまで「文明」を広めるために行った「啓蒙の工夫」を彼の『世界国尽』を分析することで明らかにしている。氏は福沢がここでイラストをふんだんに使って「見た目にも楽しい立体的な『世界案内』を作り上げて」いるばかりでなく、概説的な説明の他にも、「七五調の軽快な説明」を加えていることに注目し、ここには「啓蒙のリズム」とでも言うべき息吹」が響き渡ってくるように感じられると述べている。

氏のこのような指摘は、本書自体の工夫にも当てはまるように思える。つまり、若者を主な対象とした本書において著者は、ドストエーフスキイと福沢の二人の旅行図や詳細な年表を入れることにより、両者の行動を目で見やすいように工夫しており、また難解な主題を分かりやすい「です・ます体」語りかけるように書いている。

さらに、氏はドストエーフスキイからの引用を「分ち書き」で記述しているが、このことにより饒舌な文体のゆえに見過ごされがちな、ドストエーフスキイの思想の骨格が、あたかも屹立するかのようになり、目を見張るような緊張感を伴って浮かび上がってくる。これらの工夫により声川氏は、ドストエーフスキイと福沢の思想の特徴とその違いを明確にしている。

このように見てくると、『夏象冬記』において西欧文明への懐疑と鋭い批判を記したドストエーフスキイと西欧文明への啓蒙活動を積極的に行った福沢とは驚くほどに正反対のように見える。しかし、声川氏は「明治維新から一〇年経つか経たぬかのうちに」、福沢論吉も『文明』のレール上を走る『蒸気車』に何か『軋み』の存在すること（二六二）に気付くことに注意を促す。

こうして、第五章では福沢がぶつかった「壁」の考察がなされている。『文明論之概略』（一八七五年）の最終章で福沢は「学問も士官も唯銭のためのみ、銭さえあれば何事も勉めざるも可なり、銭の向ふ所は天下に敵なしとて、人の品行は銭を以て相場を立たるもの如し。…中略…今の人民は重荷を卸して正に休息する者なり」（一八八）と記している。この文章に注目して声川氏は、ドストエーフスキイがパリで認めた『小銭』の精神に「縮こまり」つつあったプチ・ブル社会（一六九）と、「同じ現実」を福沢は「自らの足元に新たに見いだすことになった」（一八九）ことを重視している。

両者の類似はこれだけではない。声川氏は第一章でドストエーフスキイが当時のパリやロンドンの現実「個人主義の原理」と「対立の原理」を見たことを指摘していたが、福沢も『文明論之概略』において、当時の国際関係を分析して、「欧人の触る、所は恰も土地

の生力を絶ち、草木も其成長を遂ること能はず。甚だしきは其人種を殲すに至るものあり」と述べていることを指摘している（二〇六―七）。

ドストエーフスキイは近代西欧文明をキリスト教的な「預言者的な情熱」で厳しく批判したが、一方の福沢論吉は「耶穌教」の理念を高く評価しつつも、その国々で行われている弱肉強食の現実から、「国なく人なければ之を我日本の文明と云ふ可からず。…中略…自国の独立を以て文明の目的と為すの議論を唱る」（二〇八）と主張した。こうして「学問のすゝめ」において「一身独立」して「一国独立」する」とした福沢のモットーは、その順序を変え、「まず何よりも目指すべきは『国の独立』（二〇九―二一〇）とされたのである。

こうして声川氏は福沢の選んだ道が「国権 至上主義の道」（二一一）へとつながったことを指摘するとともに、「今の世界は商売と戦争の世の中」と福沢の断言したとおりに、日本も「戦争」から「商売」へと『文明列強』の進む道の両極を、結局は一貫してラディカルに突き進んで来た」（二一一―二）と日本の近代化のあり方も厳しく批判している。

『夏象冬記』を論じたE・H・カーは、「観察と描写の才能は具体的な物事においてはきわめて貧弱であった」と評し、寺田透氏もこの作品の読みにくさを強調したが、これまで『夏象冬記』は概して低い評価しか与えられてこなかった。これに対して川端香男里氏は「以前から考えていた西欧観を吐き出そうとしたもの」と一定の評価を示した。声川氏はさらに聖書が果たしている役割を厳密に分析することによって、この作品が「ドストエーフスキイ文学の新しい誕生」

に深くかわわっていることを明らかにしたのである。

なお、本書は主に予備校生を対象に『夏象冬記』を論じた全八回の連続講座のうち一回分の講演記録を基にまとめられたものであり、著者はドストエフスキイと福沢諭吉が、長い「浪人時代」を過ごしつつも、「それぞれに力を蓄え、『時』を待っていた」(一〇九)と温かい励ましをも送っている。著者の誠実さと熱意とともに、ドストエフスキイの思索との真摯な対峙を迫る気迫も伝わってくる。

地球の温暖化などによって近代西欧文明の問題点と直面するようになった現在、果たしてキリスト教が解決策を与えうるかどうかについては議論の余地があるが、哲学や近代化の問題を根本的に考えようとする人、ことに若者にぜひ読んでもらいたい書物である。他日、連続講義の別の回の講演記録が出版されることも期待したい。